# 教室談話における日本語母語話者教師と
# キルギス人非母語話者教師の「笑い」とポライトネス

西條　結人（広島大学）

## 1. はじめに

「笑い」とは，会話参加者に楽しさや，安らぎを与え，気分を高めたり，リラックスした雰囲気を引き出したりする（木村他, 2013）行為である．外国語教育や日本語教育において，教室内に「笑い」が多いことは優れた授業が備えている特性の 1 つであり（Wragg, 1970; 中川他, 2021 等），教室内での「笑い」は肯定的な行為として捉えられている．

教室談話は，自由談話とは異なる構造を有しており，教師（評価者）対学生（被評価者）という上下関係が存在し，緊張感が伴うものである（木村他, 2013; 山下, 2014）．また，授業は文化的な営みであり，人々の間で共有されている文化的信念に基づき，その社会特有の授業の型が作られている（Stigler et al, 2009）．

「笑い」は，言語文化圏により意味の解釈が異なるものであり（笹川, 2020），日本とは異なる言語文化圏での日本語授業の場合，その国や地域の教育文化を背景とする現地の非母語話者教師と，日本の教育文化を背景とする母語話者教師の間で，「笑い」に対する価値観が異なる可能性も考えられる．母語話者教師と非母語話者教師が行う日本語授業における「笑い」を分析することは，二者間の教育文化の特徴を明らかにすることにつながり，海外の日本語教育現場における教育方法や教育支援の在り方を検討する上で重要である．

## 2. 先行研究

日本語授業の教室談話における「笑い」に関する研究としては, Hayakawa（2004）, Ohta（2008），木村他（2013）等が挙げられる. Hayakawa (2004) は，経験のある教師と実習生が行う上級日本語学習者対象日本語授業を比較し，二者間の「笑い」の機能と出現傾向を明らかにしている. Hayakawa（2004）は，教師による「笑い」には，タイプ A（教師が面白いことを考えて，発言した時に教師自らが笑ったものと学習者がそれを聞いて笑ったもの），タイプ B（教師自身もしくは他者が発言した内容を訂正する際に発生する基調を和らげるために笑ったもの），タイプ C（教師自身が何かしたことの恥ずかしさをごまかすために笑ったもの）の 3 つのタイプがあると述べている．そして，経験のある教師と実習生の間で「笑い」のタイプと出現頻度に差が生じていることを明らかにしている. Ohta（2008）は大学の初級日本語クラスの教室談話を分析している. Ohta（2008）は，学習者の誤用に対し，教師が「笑い」を伴いながらフィードバックをすることは，教師が，教師と学習者間で共通理解を計り，学習者に楽しく日本語を使用させるとの意図があると報告している．木村他（2013）はアメリカの大学の初級日本語クラスにおける「笑い」の出現場面と機能を明らかにしている．木村他（2013）は，「教室内の雰囲気作りの場面」「教師自身のフェイスが侵害される恐れがある場面」「学習者のフェイスが侵害される恐れがある場面」「授業の本筋への移行場面」「授業の目標言語導入の場面」「場面の特定が難しいもの」の 6 つの場面で「笑い」が出現し，機能として，教室の雰囲気作りや誤用訂正による学習者のフェイス侵害回避の機能，授業展開や内容を際立たせる機能の 2 点を挙げている．

教室談話とポライトネス理論（Brown and Levinson, 1987）の関連を分析した研究には，山下（2014）が挙げられる．山下（2014）は，外国人学習者対象の日本語教育と日本人英語学習者対象の英語教育の教室談話で出現したポライトネス・ストラテジーを比較分析している．その結果，ネガティブ，ポジティブの両方のポライトネス・ストラテジーが 1 つの談話，一文の中で使用されることで，教師と学生間の相互作用のバランスを良好に保つことにつながると指摘している．

教師の「笑い」に関する研究の多くは母語話者教師が対象であり，フェイスの概念等からも示されているが（木村他, 2013），非母語話者教師の「笑い」については触れられていない．教室談話とポライトネスの研究（山下, 2014）では，母語話者教師のポライトネス・ストラテジーの種類が明らかにされているが，「笑い」とポライトネスの関連は明らかにされていない．

世界の日本語教師数 74,592 名のうち, 61,381 名は非母語話者教師であること（国際交流基金, 2023），そして，海外の日本語教育をめぐっては，日本から赴任した教師による提言と現地教師の価値観との乖離に起因する現地教師の非受容的な姿勢（平畑, 2014）が指摘されている．これらのことからも，海外の日本語教育現場での教室談話における非母語話者教師の「笑

い」の特徴を明らかにすることや，母語話者教師と非母語話者教師の教室談話を比較し，二者の「笑い」の特徴を対人関係に関わる観点であるポライトネスとの関わりから検討することは必要であろう．

そこで，本研究では，キルギスの高等教育機関で開講されている日本語授業におけるキルギス人非母語話者教師と母語話者教師の「笑い」をポライトネスの観点から明らかにすることを目的とする．

本研究でキルギスを研究対象とする理由については，次の 2 点である．第一に，キルギスは日本の政府開発援助（ODA）対象国であり，これまで日本から国際協力機構や国際交流基金を中心に母語話者教師が指導的立場で赴任していることである．日本からの赴任教師には現地の非母語話者教師への教育方法改善の提言，非母語話者教師の養成・教師教育への貢献が求められている（ヴォロビヨワ,2022）．第二に，キルギスの大学では，現地採用の母語話者教師の数は少なく，非母語話者教師が中心となり活動している．現地の文化的信念が教育（日本語授業）により反映されていると判断したことによる．

## 3. 調査の方法

研究目的を達成するため，キルギスのビシケク市にある国立大学での 80 分 1 コマの日本語授業（科目名称: 母語話者教師「第一外国語（Основной иностранный язык）」，キルギス人非母語話者教師「第一東洋言語（Основной восточной язык）」）を，それぞれ 1 本ずつ録画し，映像と文字起こししたものをデータとして用いた．母語話者教師は日本の公的機関からの派遣教員，キルギス人非母語話者教師は現地採用の教員である．二者ともに，教授歴は 3-5 年程度の中堅である．

本研究で用いた日本語授業データの詳細については，次の表 1 の通りである．

**表 1　本研究で扱う日本語授業データの詳細情報**

| | 母語話者教師 | キルギス人非母語話者教師 |
|---|---|---|
| 学習者数 | 18 名 | 6 名 |
| 学年・レベル | 学部 3 年生（日本語主専攻）・初中級 | 学部 1 年生（日本語主専攻）・初級 |
| 使用テキスト | 『上級へのとびら―コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語―』<br>第 15 課「世界と私の国の未来」 | 『J.BRIDGE for Beginners vol.1』<br>第 13 課「日本の地理」 |
| 教室内の使用言語 | 日本語，ロシア語 | 日本語，ロシア語 |
| データ収集時期 | 2023 年 11 月 | 2022 年 3 月 |

本研究では，非母語話者教師による日本語授業も扱うことから，日本語だけではなく，それらの媒介語での教師の「笑い」も分析の対象とした．日本語だけではなく，教師や学習者が発話したロシア語の発話についてもすべて文字化した．ロシア語の文字化にあたっては，ビシケク市在住のロシア語母語話者にネイティブチェックを依頼した．得られたデータは，笹川（2020）の印象操作を意図する「自己呈示の「笑い」」を用い，（1）「呈示儀礼の笑い」（相手のフェイスを積極的に評価する行為に添えられる「笑い」），（2）回避儀礼としての「笑い」（相手のフェイスを脅かす可能性のある行為に添えられる「笑い」），（3）品行に関する「笑い」（自分のフェイスを脅かす可能性のある行為に添えられる「笑い」）の 3 種類に分類し，分類結果を Brown and Levinson（1987）のポライトネス理論と関連させながら，質的に分析を行った．

## 4. 結果と考察

分析の結果，教師の「笑い」は，母語話者教師の授業では 28 例，キルギス人非母語話者教師の授業では 6 例出現した．笹川（2000）「笑い」の種類別に分類した結果は，次の表 2 の通りである．

**表 2　母語話者教師とキルギス人非母語話者教師の「笑い」の出現数**

| 「笑い」の種類 | 日本語母語話者教師 | キルギス人非母語話者教師 |
|---|---|---|
| 呈示儀礼の「笑い」 | 18 | 2 |
| 回避儀礼の「笑い」 | 6 | 2 |
| 品行に関する「笑い」 | 4 | 2 |
| 合計 | 28 | 6 |

表 2 からキルギス人非母語話者教師と比べ，母語話者教師の方が教師による「笑い」を多く使用したことが確認できる．本研究で出現した 3 種類の「笑い」について，具体的な談話例を取り上げながら，結果を報告する．本稿では紙幅の都合上，そ

れぞれの「笑い」の代表的な談話例を 1 例ずつ取り上げる．本研究の談話例に用いた記号については，母語話者教師の発話はNT，キルギス人非母語話者教師の発話はNNT とし，その他は，木村他（2013）で用いられている記号を参考に表記した．

まず教師による呈示儀礼の「笑い」は，学習者のフェイスを積極的に評価する行為に添えられる「笑い」であり，次のような談話例が確認された（談話例（1））．

談話例（1）

| 番号 | 話者 | 発話内容 |
|---|---|---|
| 1 | S01 | 世界で一番大きな海はイシククルです． |
| 2 | NNT | はい，イシク，クルですね．Отлично．Чуть по громче，〈S01 氏名〉さん．Кто еще?【挙手を求める．】<br>訳: （はい，イシク，クルですね．）素晴らしいです．もう少し大きな声で．（〈S01 氏名〉さん．）他に誰かいますか． |
| 3 | S02 | 【5 秒後，S02 が手を挙げて．】キルギスタンで一番大きい湖はイシククルです． |
| 4 | NNT | Все по Иссык-Куль, да? hahaha.はい(.) いいですね．Отлично．<br>訳: 皆さん，イシククルについてですね．（笑い）（はい，いいですね．）素晴らしいです． |

（1）の例は，学生が発表した作文に対するキルギス人非母語話者教師の「笑い」である．キルギス人非母語話者教師は，S01 が発表した後で，発話 2 で次の回答者に発言を求めている．しかし，次の回答者 S02 が挙手するまでの間，学生の手が挙がらず，5 秒間沈黙が続いた．あまり活発ではない様子が録画データからも分かる．そのため，キルギス人非母語話者教師が冗談を交えて「笑い」を行うことで，教室の雰囲気を明るくし，学生の気分を盛り上げようとしたことが考えられる．

教師による回避儀礼の「笑い」は，学習者のフェイスを侵害する恐れのある行為が行われる場合に添えられるものである．本研究では，次の談話例（2）のような例が出現した．

談話例（2）

| 番号 | 話者 | 発話内容 |
|---|---|---|
| 1 | S03 | 日本の(. )あ(.)一番高い山は． |
| 2 | NNT | Нет. Еще раз.<br>訳: いいえ．もう一度． |
| 3 | S03 | 日本で一番: (. ) hahaha. |
| 4 | NNT | 高い? Hahaha. |
| 5 | S03 | あ: . 日本で一番高い山は富士山です． |
| 6 | NNT | 日本で一番高い山は富士山です．Вспомнили? Ичибан – самый.<br>訳: （日本で一番高い山は富士山です．）分かりましたか。「一番」は самый のことです． |

談話例（2）は，キルギス人非母語話者教師がテキストの練習問題を用いて，新出の文型を指導している場面である．発話 1，発話 3 のように S03 は進出の文型を使って上手く発話することができず，発話 3 で「笑い」が起きる．それに対し，教師は発話 04 で S03 が上手く発話できるように支援しつつ，「笑い」を用いている．教室では教師（評価者）・学習者（非評価者）という関係性のもとで誤用を訂正しなければいけない．教師が学生のフェイスを侵害しないように配慮したものであり，学生に対し教師が笑って返答し「笑い」の連鎖が起こっている。結果として，教師の「笑い」行為によって，親和的な態度を示し，学習者のフェイス侵害を最小限に誤用を訂正することができたと推測される．

教師による品行に関する「笑い」は，教師自身のフェイスを脅かす可能性のある行為に添えられる場合に添えられるもので，談話例（3）のような例が確認された．

談話例（3）

| 番号 | 話者 | 発話内容 |
|---|---|---|
| 1 | NT | キルギスの人はあんまり twitter を使うイメージが無いんですが (. ) 使わない: (. )よね? 使ってます? |
| 2 | Ss | 使っています． |
| 3 | NT | 使っていますか．ああ. (. )そうですか. hahaha. 使ってた． |
| 4 | S04 | 知っている人の中で皆使っています． |

談話例（3）は，発話 1 では教師から教師自身が持っているキルギス人のイメージについての質問が行われ，発話 2 で複数の学生によって修正され，発話 3 でそれに反応した教師の「笑い」である．学生からの修正に対する照れ隠しの「笑い」であり，教師自身のフェイスを守るための「笑い」であると考えられる．

本研究で得られた結果をポライトネス理論（Brown and Levinson, 1987）との関わりから考察すると，母語話者教師の「笑い」は，学習者とのコミュニケーションの中で，ポジティブ・ポライトネスを重視する傾向があった．特に，呈示儀礼の「笑い」の出現比率が高かったことから，教師が学習者と積極的に関わりたいという意図が見受けられる．一方で，キルギス人非母語話者教師はネガティブ・ポライトネスを重視し，教師にとって教室での好ましくない状況に対し「笑い」を用いることでそれを回避しようとしていることが考えられる．すなわち，母語話者教師は，「笑い」によって，学習者との共感を高めつつ，雰囲気を明るくし，学習者がリラックスした中で授業を行っているのに対し，キルギス人非母語話者教師は，学習者のフェイス侵害の回避や教師自身のフェイスの防御を重視しつつ，慎重に授業を行っていることが考えられる．

本研究の結果から，Stigler et al.（2009）や笹川（2020）で指摘されているように，授業での文化的信念や「笑い」に対する価値観が，母語話者教師とキルギス人非母語話者教師間で異なる可能性があることが考えられる．

## 5. 今後の課題

本研究では，日本語授業の教室談話における母語話者教師とキルギス人非母語話者教師の「笑い」をポライトネスの観点から分析してきた．今後の課題は次の通りである．本研究で扱ったキルギス人非母語話者教師の日本語授業では先行研究や本研究での母語話者教師の「笑い」の出現数と比較し，教師の「笑い」があまり出現しなかった．その要因が教師自身の性格等によるものなのか，キルギス文化圏での日本語授業の特徴によるものなのかどうかを，更にデータを追加して検証する必要がある．日本語授業における母語話者教師と非母語話者教師の「笑い」とポライトネスの関わりが，海外日本語教育の充実や課題の解決にどのような貢献が可能なのかを探るためにも，今後更なる分析を行う必要がある．

**謝辞**　本研究は JSPS 科研費 21K02321 の助成を受けたものである．また，本研究を遂行するにあたり，ビシケク国立大学のジュヌシャリエワ・アセーリ上級講師に多大なご協力をいただいた．深く感謝を申し上げる．

**参考文献**

Brown, P. and Levinson, S. (1987). *Politeness: some universals in language usage*. Cambridge University Press.

Hayakawa Haruko (2004). Laughter in the Second Language Classroom: A Comparison of Teacher Trainees and Experienced Teachers. *Language and Culture*, 16, 67-80.

平畑奈美 (2014). 「ネイティブ」とよばれる日本語教師―海外で教える母語話者日本語教師の資質を問う― 春風社.

木村典子, 伊藤亜希, 福原涼子, 本田雅美, 今里葵, 永田良太 (2013). 教室談話における教師の「笑い」―初級学習者を対象とした日本語授業の場合― 広島大学大学院教育学研究科紀要第二部文化教育開発関連領域, 62, 253-260.

国際交流基金(2023). 海外の日本語教育の現状―2021 年度海外日本語教育機関調査より― 国際交流基金. https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2021/all.pdf（2024 年 11 月 30 日閲覧）

小山悟(2009). J.BRIDGE for Beginners vol.1 凡人社.

中川良雄, 小西達也, 岡林花波(2021). ベトナム人学習者が考える「いい授業」, 無差, 28, 1-12.

Ohta, A.S. (2008). Laughter and Second Language Acquisition: A Study of Japanese Foreign Language Classes. Mori, J. and Ohta A.S.(Eds.) *Japanese Applied Linguistics: Discourse and Social Perspectives*, 213-242, Continuum.

岡まゆみ, 筒井通雄, 近藤純子, 江森祥子, 花井善朗, 石川智 (2009). 上級へのとびら―コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語― くろしお出版.

笹川洋子(2020). おしゃべりなポライトネス―会話の中の共話・話題交換・笑い・メタファー― 春風社.

Stigler, James W., Hiebert, James (2009). *The Teaching Gap: Best Ideas from the World's Teachers for Improving Education in the Classroom*. FREE PRESS.

ヴォロビヨワ・ガリーナ (2022)「特集 海外における日本語教育 キルギス共和国における日本語教育―歴史，現状，課題―」『季刊 日本語学』41（4）, pp.56-66, 明治書院.

Wragg, E. C. (1970). Interaction Analysis in the Foreign Language Classroom. *The Modern Language Journal*, 54 (2), 116-120.

山下早代子 (2014). 教室談話に見られるポライトネス―日英教室談話の比較― 明海大学大学院応用言語学研究, 16, 103-115.